

探訪 北の風景 97

知床五湖と 100平方メートル運動 オホーツク管内斜里町

青木和弘

知床五湖は世界自然遺産の知床国立公園で最も観光客が訪れる場所だ。知床半島のオホーツク海側の真ん中あたりにあるウトロ市街から北東に約15キロにある。4000年ほど前に知床硫黄山が噴火で山体崩壊して岩屑（がんせき）なだれでできた地形の窪地に水が貯まって形成された。写真は、植生の保護とヒグマ対策の電気柵なども施した高架木道から眺めた知床連山だ。右端の一番高い山が羅臼岳（標高1661メートル）である。斜里町の誕生は1872（明治5）年だが、知床の開拓はそれから42年後の1914（大正3）年から。港のあるウトロから5キロほど北東の岩尾別地区の原野に7戸が入植した。一時期、約60戸の集落があったが、水利が悪く転石に覆われた

土地は畑に向いていなかった。さらに冷害や干ばつ、バッタ被害が追い打ちをかけ、すべての農家が離農した。第2次入植は38（昭和13）年からで、第3次の戦後開拓は49年から試みられ、入植者は45戸になった。

60年に森繁久彌主演の映画「地の涯に生きるもの」が配信され、「秘境知床」が注目を集め、64年、手つかずの自然の価値が評価され国立公園になった。71年に加藤登紀子の「知床旅情」が大ヒットして知床ブームが到来、観光客が押し寄せた。

時代はさらに動く。「日本列島改造論」による土地投機ブームで、国立公園内の開拓地にも道内外の不動産業者が手を伸ばし、やせた土地での営農に見切りをつけ、開拓地を手放す農家が増え始めた。一方、知床を乱開発から守ろうという機運が高まり、金儲け主義の観光地をつくるのは反対だと、離農しても、業者への土地の販売を拒否する開拓者も少なからずいて開拓地が残った。

当時の藤谷豊町長は、知床五湖近くまである開拓跡地全体を買い取って、原始の森に復元できないかと考えた。業者への販売を拒んだ農家からは行政による土地の買い上げを求める切実な声が寄せられていたのだ。藤谷は74年ごろから度々上京して霞が関の省庁を回って開拓地買い上げを求めたが断られ続けていた。いつまでも離農者を困らせたくないという思いが強くなった。

76年ごろに藤谷の考えが固まったという。「た



知床硫黄山から湧き出す温泉が流れているカムイワツカの滝。落石の危険があって現在は1の滝から上へは登れないが、知床国立公園を管理する知床財団では、安全を確かめて滝つぼの温泉を楽しむようにしたいと調査を続けている

作りたい。知床の森を再生するためだといえは協力してくれる人もかなりいるはず」という確信が生まれていた。77年1月16日、藤谷は朝日新聞の「天声人語」欄を読んでイギリスの「ナショナルトラスト」運動を知った。たくさんの人々の寄付で基金をつくり、その国の大切な歴史的環境や景観を守ってきたというものだ。「よし、これでいこう」市民こそ味方だと腹を決めた。

2月26日、藤谷は斜里町役場で記者会見をする。翌日には反応がなかつたが、翌々日の2月28日、北海道新聞が夕刊で9段に及ぶ写真入りの記事で大きく報じた。「知床国立公園で百平方メートル運動」「八千円で自然を買って」「乱開発に歯止め、離農跡地 支援金で植樹」という見出しだった。

この記事の反響は大きく役場に問い合わせが殺到した。こうして知床の100平方メートル運動が



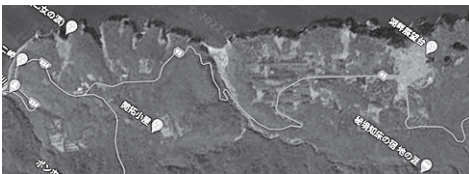


駐車場のある知床五湖フィールドハウスから木道（片道約800メートル）で「1湖」の湖畔展望台まで往復40分程度。遊歩道に降り一湖と二湖も巡るなら80分、五湖すべてを回るなら130分ほどかかる。遊歩道には入域制限があり「ヒグマ活動期」（5月10日～7月末）は1日300人までで、ガイドツアー申し込みとガイド同行が入域条件になっている

1974年の開拓跡地（斜里町ホームページより）



約45年経った最近の開拓跡地（Googleマップより）



上の航空写真は1974年の開拓跡地で、樹木がない畑や牧草地が白く見え、右端に黒く見えるのが知床五湖だ。下は45年ほど経った最近の開拓跡地。ほとんどが緑の木々に覆われている

始まった。2年後に同じく「天声人語」が取り上げ、賛同者が10倍のペースで増えた。88年に参加者が3万人を超え、97年に目標金額を達成した。買い取り対象地は57件472ヘクタールで、それまでに、町内の1件を除いて買い取りを終え、募金は終了した。現在は「100平方メートル運動の森・トラスト」として本格的な森づくりが、1口5000円の寄付とボランティアを募っている。

左の74年の航空写真と最近の航空写真を比べてみると、知床五湖のすぐ西側まで白っぽかった開拓跡地のかんりの部分が、現在は緑に覆われているのが分かる。斜里町には毎年1600万円ほどの寄付が寄せられ、増え過ぎたシカの食害に苦勞しながら、100年後、200年後を見据えた復元計画で、ボランティアによる植樹が続けられている。故藤谷町長のエピソードは、『よみがえれ知床』（朝日新書）を参考にさせていただいた。